
妖と陰陽師

瑠璃色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖と陰陽師

【Nコード】

N3966Z

【作者名】

瑠璃色

【あらすじ】

注意

これは作者の妄想から出来てますのでクオリティが低いです。

関東大妖怪任侠一家奴良組の三代目、ぬらりひよんの孫の奴良リク才が通う学校に転校生がやってきた。

「花開院 朝日です。よろしくお願いします。」

花開院と名乗る彼女の正体とは？

京都編

再び京都にやってきた清十字怪奇探偵団。

清十字怪奇探偵団が京にはびこる悪を滅する！？

設定

設定

花開院 朝日（けいかいん あさひ） 妖怪の時 茜色 朝日（あかねいろ あさひ） 13歳
妖怪と陰陽師の娘。

見た目 黒羽丸の人間で女バージョンのような感じ。和風美人だが夜になると瞳が紫色になる。妖怪の時と人間の時の外見がほぼ一緒。陰陽師として居る時は何処でも黒縁眼鏡にポニーテール。

性格 お姉さんぽい。少し抜けている所がある氷麗のサポート役。公私きちんと分けていて、公 真面目で努力家。完璧人間。私 秀元と悪のり、からかいをしている。お茶目。

力 齢六歳にして陰陽術をきわめた努力型の天才。休日は陰陽師として一人で仕事をこなしている。誰も知らなかったが式神破軍を使える。ちなみに戸籍上では花開院 朝日となっていて真名を知っているのは奴良組、花開院のごく一部の人物のみ。

その他 奴良組には修行の合間や手が空いている時の長期休暇のときに遊びに来ていた。やる事が無いので色々経験しようと世界をまわっていた。秀元と仲が良い。氷麗とも姉妹のように気が合う。奴良組の頼れる妹的存在。

付け足しがありましたら追加します。

設定（後書き）

付け足しました。

分からないところがあったらいつててください。

転校生（前書き）

本編です！

カナ視点となっています。

転校生

浮世絵町。 奴良リクオの通う学校。

「今日は転校生を紹介する」

ザワツ！クラスが急に騒がしくなる。 男？女？どんな子？と話している。 私はチラツとリクオ君を見る。 リクオ君は特に興味がないようにで班の男子の話に相槌をうっている。

「静かに！入れ」

先生は一喝した後転校生を呼ぶ。 どんな子だろう？と皆、ドアを食い入るように見つめている。 私もドアを見つめた。
ガララッ！入ってきたのは黒髪の和風美人な女の子。

「花開院 朝日です。 よろしくお願いします」

花開院？じゃあこの子も陰陽師なの？

この間家のことが一段落して戻ってきたゆらちゃんの方を見る。 ゆらちゃんも困惑していた。 たまたま一緒の名字なだけかも。 私はそう結論付けて考えるのを止めた。

お昼。 屋上。

私と巻さん、鳥居さん、島君、清継君はリクオ君、及川さん、ゆらちゃん、朝日さんを追っていた。 なぜならお昼になると、四人で駆けていってしまったからだ。

「どづいうことや？朝日姉。 うち、何も聞いてへんけど」

ゆらちゃんが朝日さんに詰め寄る。

朝日姉と呼んでいたから、やっぱり知り合いだったみたい。でもな
んでさつき困惑
していたのかな？

「え、竜二から聞いてない？」

「聞いてへん！！」

ゆらちゃんは一気にまくしたてたからかゼーハー言っている。

「朝日、久しぶり」

リクオ君が笑う。及川さんもニコツと笑う。

「久しぶり、氷麗、『総大将』！」

その言葉が意味することに気づくのは後二分後のこと。

転校生（後書き）

グダグダで申し訳ありません（-_-;）
誤字、脱字ありましたら指摘お願いします。
感想も書いていただけると嬉しいです。 > m（-_-） m <

朝日の秘密（前書き）

今回もカナちゃん視点です！

今回、試しに会話文と地の文を一行あけて書いてみました。
感想があったら感想書いてくれると嬉しいです。

朝日の秘密

「じゃあ朝日も妖怪・・・なの？」

巻さんが信じられないという表情で尋ねる。私たちも妖怪についてはこの間、リクオ君と及川さんに聞いたばかりだからよく分からないけどリクオ君の事を『総大将』と呼ぶのは妖怪だけだということぐらい分かる。

「うん。そーよ」

深刻な表情で聞いたのに、朝日さんの返事は拍子抜けするぐらいあっさり、すつきりしたものだ。リクオ君と及川さんとゆらちゃんが苦笑している。

「妖怪と陰陽師のハーフなの」

重大な秘密な筈のこともばらしている。皆啞然としてみると、飄々とした宮司さんのような格好をした人がやってきた。確かゆらちゃんの式神の・・・。

「秀元、学校終わるまで待っててよー」

「えーちよっとぐらいいいやんかー。なあゆらちゃん」

秀元さんがゆらちゃんに尋ねるが、ゆらちゃんは固まっている。どうしたんだろ？そんな驚くことかな？ゆらちゃんの式神なんだからびっくりすることないのに。

「うち、破軍よんでないで」

えっ？秀元さんはゆらちゃんの式神じゃないの？それにゆらちゃんじゃなかったら誰が呼んだんだろう？清継君たちも困惑している。

「私が呼んだの。秀元はゆらだけの式神じゃないの」

『なるほど！』

皆の声が重なる。同じことを考えてたのかな？

「そろそろご飯にしない？」

リクオ君の提案でご飯を食べることにした。

そして成り行きで朝日さんも清十字怪奇探偵団に入ることになった。

放課後

「週末、京都に行こう！この間は妖怪に会えなかったしね！」

『えー！！』

すごく嫌な予感がする。あの時みたいにならないといいけど。。。

朝日の秘密（後書き）

どうでしたか？

悪い点、その他感想ありましたら感想に書いてください！

京都へ（前書き）

今回は神視点です。

京都へ

奴良組の朝は遅い。なぜなら妖怪というのはだいたい夜行型だからだ。

そんな奴良組に日の昇ったばかりの時間に身だしなみを整えている者がいた。

花開院 朝日

花開院家の陰陽師にして、奴良組の妖怪。

珍しく朝日は和服を着ていた。白い着物に藍色の袴。そして黒縁眼鏡に、ポニーテール。

なぜこんな格好をしているのかというと、朝日は陰陽師として居るときはいつもこの格好なのだ。

朝日曰く「形から入るタイプだから」らしい。

今日は京都に行く日。一人は寝れないほど心待ちに、一人は悪夢を見るほど来て欲しくなかった日。

集合場所。

「遅いじゃないか！ん？朝日さん、それは陰陽師の服なのかい？」

清継が朝日の服がいつもと違うことに気づいたよつで朝日に尋ねる。

「違うよ。けどいつもこの格好だから。ほら、何事も見た目からっていでしょ？」

清継と朝日はのんきに話していたが

「二人とも早くしないと出発しちゃうよー！」

リクオの声で二人も駅に入ってしまった。

「この間は妖怪に会えなかったけど今回こそは！」

清継はそんなことを言っているが、カナや鳥居からしたらいい迷惑だ。

だが清継がそんなことに気付くわけもなく、三者三様に京都へ思いを馳せていた……。

京都へ（後書き）

突然ですが朝日の妖怪の時の名前を変更させていただきました。

溲聖 茜から茜色 朝日（あかねいろ あさひ）になります。

理由は読み返していたら、名前が違うのはわかりずらいと思ったからです。

すみませんm（ ） m

後、設定も付け足したので見てみてください。

花開院家（前書き）

ゆらちゃん視点です。

かなりエッセ京都弁です・・・。

作者は東京生まれで京都市行ったことないです。

花開院家

花開院家

「ただいまー」

うちらを出迎えてくれたのは秋房兄ちゃんやった。

「ゆら、お煎餅、畳に落とさないの。気をつけて」

朝日姉に言われ、ぼーっとしていてお煎餅をこぼしていたことに気づく。朝日姉は気だてが良く皆に好かれている。朝日姉は昔からなんでもできて優しかった。けれどうちと二人きりになるといたずらっこみみたいな表情になって、よくふざけてた。朝日姉は修行も手伝ってくれてたから、外国に行っちゃってさみしかったなあ。

「ゆら、またお煎餅落としてるよ？どうしたの？ぼーっとしちゃって」

「考えごとしてただけや」

うちがそういうと曇っていた表情を明るくさせた。朝日姉は優しいが怒るとめちやくちや怖いんや。にこにこ不気味なぐらい笑顔で笑い掛けられて冷や汗を掻いたことがある。そのくらい怖い。

竜二兄に陰陽術の基本を教えたりしてたらしいんや。きつとおしえるのも上手いんだらうなあ。

そんなことを考えていると不意に後ろから声をかけられた。

「帰ってきてたのか？」

花開院家（後書き）

区切りあまりよくなかったですね。

次回朝日のもうひとつの秘密があきらかに!?

ヒントは「朝日って身長、165cmもあるって高いよね?」と
竜二って年下に習うかな?」です。

答えは次回のお楽しみです!

朝日は本当は・・・（前書き）

朝日のもう一つの秘密、予想付きましたか？

本編にはあまり深く関わらない秘密なので深く考えなくていいと思います。

今回は朝日視点です。

朝日は本当は・・・

「帰ってきてたのか？」

声を掛けてきたのは竜二だった。竜二は私を見ると、何か思い出したような顔をして、

「学校にしばらく休むって伝えといたぞ。」

学校・・・あ、高校のか！

「ありがとう。」

竜二が微かに微笑んだ。口は悪いけど顔がいいからその様子もさまになってる。

「学校って？」

夏実ちゃんが聞いてくる。あれ？言っていなかったけ？

「高校生だよ？私」

皆ポカーンとしている。驚くことかな？竜二は思い切り笑っている。

「じゃあ、なんで中学に？」

「勉強してるリクオのことが見たかったから」

皆固まっている。無理もないかな？頭がついていかないよね。竜二

はまだニヤニヤしている。竜二のことだからこうなることに気づいていたんだろう。

「朝日、高校にもどってね？」

リクオが黒い笑みを浮かべている。あれ？確か

「私、一週間他校見学でいますって言わなかった？」

「そういえば・・・！」

結局忘れてただけらしい。私は竜二と同じ学校に通っていて、学校への連絡は竜二に任せている。もしかしてわざとあのタイミングで言ったの？竜二らしいけど。

そして京都の観光スポットを案内することになった。主に神社とかだ

朝日は本当は・・・（後書き）

朝日の秘密は実は高校生でした！

朝日はお茶目ということとやっぱり総代将に過保護ということをかっでもらったための設定だったりします。

番外編 1 パラレルワールド 1 (前書き)

ちよつとしたネタ切れになりまして……。
なので原作と妖と陰陽師のクロスをと……。
思いつきですが見てください。

視点は神の眼というか……私です？

原作キャラは

ぬらりひよんの孫 side リクオ (清継、カナ、巻、鳥居、島、
氷麗)

??? side リクオ (清継、カナ、巻、鳥居、島、氷麗) に似
た少年 (少女)

表記になっています。

番外編 1 パラレルワールド 1

パラレルワールドとは「観察者がいる世界から、過去のある時点で分岐して併存するとされる世界。並行世界。」だという。そんなパラレルワールドのお話。

ぬらりひよんの孫 side

ある日の清十字怪奇探偵団。

「パラレルワールドの都市伝説をしっているかい？」

珍しく妖怪の話じゃないことを清継が話し始めた。

長いので簡単にまとめると

- 1 . 紫色の光に向かって歩いていくとパラレルワールドに行くことができる。
- 2 . 実際に体験者も多数いて皆口を揃えてこういふのだと。「黒い髪の毛の化け物がいた」と・・・。
- 3 . しかも場所が京都らしき場所で大きな屋敷だったらしい。
- 4 . 清継はその化け物が妖怪だと睨んでいるらしい。

「嘘臭くない？」

「噂でしょ？」

メンバーは皆否定している。があと数刻後に自分たちが同じ目にあうことを彼らはまだ知らない・・・。皆で帰ることになったのだが校舎の裏から紫色の光が漏れているのが見えた。

清継が行ってしまった為、皆で追いかける。リクオは光で目が見え

なくなり、目をつぶる。意識が遠のいていく。噂は本当だったのか・
・・・？もしかして妖怪の・・・。そこでリクオは意識を失った。

????side

「なんで休日在家の手伝いなのかしら？」

少女はあまりそう思っていないように見えるが、昔から彼女をしつ
ている者なら口を揃えて言うだろう。「絶対不機嫌だな・・・。」と。

「僕達まで巻き込まれてるし」

リクオもぼそつと言う。リクオも休日まで妖怪に関わらなきゃいけ
ないのかとうんざりしているのだ。氷麗は楽しそうだが。
文句を言っていると辺りを紫色の光が包む。

「またか・・・」

少女のつぶやきも光に包まれた。
どしん！！

重いものが落ちたような音がする。駆けつけた先にはリクオと氷麗
とカナと清継と巻と鳥居と島にそっくりな七人の少年、少女がいた。

「いったあ・・・」

うめき声を上げる。

「奴良君に及川君??」

清継にいた少年は後ろのリクオに似た少年と氷麗に似た少女と氷麗

とリクオを見比べ、私を見る。

「君は・・・誰だい？」

番外編 1 パラレルワールド 1 (後書き)

すみません！

セリフと地の文の間に一行あけるのを忘れてました・・・。
以後気を付けます。

番外編 1 パラレルワールド 2 (前書き)

表記は前回と同じで、神の眼視点です。
短くてすみません。

番外編1 パラレルワールド2

「君は・・・誰だい？」

少女はハアとため息をつき、肩をすくめてから

「花開院 朝日。花開院家の陰陽師よ」

清継に似た少年は目を輝かせるが、ゾクツとする程まがましい殺気にビクツと震える。殺気を出しているのは少女で顔は笑っているが、なんか怖い。

「ここはパラレルワールド。噂ぐらいは聞いているでしょ？リクオとその男の子の性格は同じよ」

リクオとリクオに似た少年を指さす。イマイチ状況が掴めないし、言っていることも分からない、リクオに似た少年達は屋敷の中へ連れ込まれ、リクオに似た少年と氷麗に似た少女のみ違う部屋に通された。

すると唐突に少女は尋ねた。

「君たちも妖怪でしょ？リクオみたいに」

「！！そうだけど・・・」

「安心して。私も妖怪と陰陽師の子だから」

少女は虚空を睨み、悲しそうに目を閉じた。そしてこちらの妖怪のことなど情報交換した。最初は堅かった空気もどこへやら。夜まで

多愛ない話は続いた。

番外編 1 パラレルワールド3 (前書き)

視点は前回と同じ、表記はリクオ(清継、カナ、巻、鳥居、島、氷麗)君(さん)です。ややこしくてすみません。

番外編 1 パラレルワールド 3

朝日

「仕事なんだけど君らも来る？」

朝日の問いかけに清継君は目を輝かせ、皆を巻き込んで行くことになった。巻さん達はブーイングしていたが

「そんなに大変な仕事じゃないから大丈夫よ」

という朝日の言葉で渋々行くことにした。

今回の仕事の内容は朝日の通う学校の妖怪退治で、朝日の通う学校の校長は妖怪方面に理解があるため、色々講義して欲しいらしく、(妖怪の認識が甘く危険なことになりかねないため、大事になる前に対処できるようにという理由で)登校日まで作って、来て欲しいとのことだった。行くのは実際に通っている朝日と竜二だった。清継君達は生徒の中に紛れていればいいとのことだった。

朝日の通う学校

「花開院家の陰陽師の花開院 朝日です」

「・・・花開院 竜二だ」

体育館に集められた生徒達は急に陰陽師だのなんだのと言われ、混乱している。

「今回はこの学校に妖怪がいるので依頼で来ました」

ざわざわと体育館が騒がしくなる。大半は笑っているが、竜二と朝日のクラスメイトは神妙な顔をしている。彼らは妖怪に遭っているからだ。しかもかなり怖い思いをしている。

ガシャンッ！急にパイプイスが倒れ出す。後ろを振り返ると妖怪がいた。数はざつと二十。おそらく陰陽師に気づき威嚇しているのだろう。

「きゃああああー！！」

誰かが叫ぶ。皆もパニックになり、あちこちで悲鳴が上がる。

「あれが妖怪です。私達が退治しますので、騒がず静かに」

「式神破軍！！」

「餓狼 喰え」

破軍で妖怪の動きを封じ、餓狼で倒した。その素早い動きに生徒は黙り込み、清継君と秀元は拍手している。

「いやーさすが花開院の陰陽師だねー」

「相変わらずやなあ、朝日ちゃん」

『当たり前』

発言まで息ピツタリだ。二人はそのまま妖怪について説明することにし、説明を始めた。

(あっちもこっちもたいして変わらないみたいだ)

(みたいですね。朝日さんがこっちにも居てくれたらよかったですね)

(アハハ・・・)

相変わらずこそそと話す二人にカナと島は疑いの視線を向けつつ、こちらも清継のストッパーになりそうな朝日が居てくれたら・・・と思ったのだった。

番外編 1 パラレルワールド3 (後書き)

次回セリフだけ、妖と陰陽師の清継が出てきて、無鉄砲ぶりを原作
リクオ達に見られます(笑)

まあ性格は同じですが・・・。

番外編 1 パラレルワールド4 (前書き)

視点、表記変わりません。

正直やりづらいです・・・。

違うところがありましたら教えてください。

「向こうのリクオ様もがんばって下さい！」

氷麗がニコリと笑いかけるとリクオ君も頷き、それが合図のように光が強くなる。

「さようなら」

その言葉の後、気を失ってしまった。

番外編 1 パラレルワールド4 (後書き)

どこまで引きずるんでしょう？

なぜか p s p でやると途中で打てなくなってしまっていて完結させられ
ませんでした・・・。

感想ください！

なんか心配になってきて・・・。

リクエストでもなんでもオツケーです

番外編 1 パラレルワールド5 (前書き)

視点はリクオ、表記はいつも通りです！

完結・・・。

番外編が一番長いってどうなのでしょうね？話数が。

番外編 1 パラレルワールド 5

ぬらりひよんの孫 side

「ううん・・・」

僕は意識が戻ったようで、辺りを見渡す。

元居た場所に戻っているようで、時計を見る限り時間も経っていない。

「あっちの僕も頑張ってたね」

誰にも聞こえない程小さな声で僕はつぶやき、あの不思議体験も今思えば楽しかったなー等と思いながら氷麗達を起こした。

さて、僕もがんばらないとね！

あれ？そういえば黒い髪の毛の化け物って誰のことだったんだろう？
朝日さんも黒髪だったよね。。朝日さんのこと？まさか・・・ね。
妖怪でも見たのかなー？

同時刻、？？？sideもとい、妖と陰陽師 side

「さて、あっちのリクオ達も帰ったし、のんびりしよっとー！」

ヘクシヨンツ！思い切りくしゃみをする。朝日は首を傾げ

「風邪でもひいたのかな・・・？」

とリクオが噂していたことなど露しらず（しかも当たっている）そんな風に解釈していた。

番外編 1 パラレルワールド5 (後書き)

感想、指摘、お待ちしてます！

最後のシーンの謎

朝日「最後のあれなんだっただの？」

瑠璃色「そのまんまの意味だよ？」

朝日「そついうんじゃなくて・・・。」

瑠璃色「詳しくはまた別の機会に説明します！」

朝日「はぐらかした？まあいつか。次回も見てくださいね！」

さよなら、京都（前書き）

番外編で妖怪出せたので京都編は終わりです！

朝日「妖怪考えるのがめんどくさいだけでしょ？」

作者「（どきっ！）な、なんのことかな？アハハハ・・・」

朝日「凶星だった・・・。という訳でダメ作者のためにキャラ募集します！人間、妖怪、陰陽師どれでも構いません。既に使っているキャラ、（いないだろうけど）このために作ってくれたキャラ、どちらでもOKです。」

作者「名前、性格、口調、能力が書いてあれば即採用！人間の場合はどのような役回りか記入お願いします。できる限りこういうシチュエーションが良いと言うのも書いてくれればやります。（あくまでもできる限りですが）」

朝日「気長に一ヶ月ほど待ちますので気が向いたらで構いません」

朝日・作者「お待ちしています！！」

さよなら、京都

朝日視点

「朝日ってさ、天才だから陰陽師になつたの？」

何気ない巻ちゃんの質問は私の本質が現れそうな質問だった。

私は、天才でも特別な力を持つてる訳でも、ない。

「陰陽師になつたのに理由はない、かな？それに私は天才じゃないよ。死にもの狂いで勉強しただけだよ？」

「えっ？」

私は、天才でも特別な力を持つてる訳でも、ない。

ただ単に死にもの狂いで勉強しただけ。

でもきつと私が勉強していなくてもなぜか使えた破軍のせいで陰陽師になつていたと思う。私は多分、あの、一歳の時の出来事が起きたときから、陰陽師になることは決まっていたのだろう。

まるで偶然にしては良く出来すぎた、運命のように。偶然ではなく、必然だったのかもしれない。

「でも朝日さんはすごいね。力がなくても努力する、なんて皆がみんな出来ることじゃないし」

カナちゃんは純粹なんだなーとのんきに思う。私はそんな風に物事を見れないから。私にとっての憧れなのかもしれない。

「そう・・・かな？ありがとう」

笑った顔をしているが、私は笑ってなかった。ぐるぐるとあの日の出来事がフラッシュバックする。そう・・・あれはもう十数年も前の事。

神の目視点

花開院家

「おい、聞いたか？妖怪、大量に出たらしいな」

「ああ。実力者はほぼ全員駆り出されたみたいだ」

男はそして一番の得だねを蚊の鳴くような小さな声で告げた。

「あの朝日っていうまだ一歳の子供も一緒に行ったらしい」

妖怪、大量発生現場

陰陽師達は既にボロボロだった。あちこちから血が出ていて痛々しい。立っているのは小さな子供一人。

妖怪は一斉に子供に襲いかかる。子供はまだ喋り初めてまもない筈なのに舌足らずな言葉でなにか唱えた。すると骸骨はくに一人の男が現れる。皆驚愕する。どこの子だか分からない子が破軍を・・・？

「こんなちっちゃい子が破軍を発動させるとはなあ。面白そうや」

整った顔立ちの先人はそう呟き消えていった。

それからだ。陰陽師の勉強を始めたのは。正直なところ理由は自分でも分からない。でも間違つては無かつたと思う。正しかつたかは分からないけど。

「朝日君〜！帰る時間だよ〜」

「朝日何一人でポーツとしてたの？」

「どうかしたの？」

「置いてがれちゃうよ〜！」

よかつたんじゃないかな？こんな時間を過ごせているのだから。

駅のホーム

「私はもう、中学には行けないけど遊びに行くから！」

さすがにずっと休む訳にもいかないし、見学の為の一週間は過ぎたから、いつまでもいるわけにもいかない。

「待ってるよ〜！」

「連絡してよ〜！」

妹と弟が出来たみたいだった。あ、訂正。ゆらがいました。まあ君らから見たら出来損ないの姉だったと思うけど。またお土産持つて

奴良組にも行こうかな？

しかし私の浮世絵町訪問は驚く程早く実現するのだった・・・。

さよなら、京都（後書き）

少し朝日の過去が露になりました。

次、どうしましょー？

感想、待ってまーす！

過去・奴良組（前書き）

疲れたあ。

この小説完結させられるでしょうか？

感想あつたら遠慮せずになんでも！

明後日から冬休み！

もう一つぐらい連載書こうかな？

神の視点です。

過去・奴良組

過去編

ある日のことだった。

清十字怪奇探偵団がその日記を見つけたのは。

「リクオ君これ何かな？」

カナが渡したのは革の日記帳だった。

一ページ目には朝霧と書かれており、手紙が挟まれていた。カサツ 音を立てて手紙が畳に落ちた。手紙が開く。

朝日へ

と書かれていた。リクオは嫌な予感がした為、急いで開く。さあタイムトラベルの始まり。

数十年前 奴良組

「若菜ちゃん！」

若菜のもとに黒髪で藍色の着物を着た女性が駆け寄る。

「なあに？朝霧さん」

「京に行くけれど家のこと大丈夫？」

「大丈夫です！朝霧さんこそ体の具合は大丈夫ですか？」

朝霧は一瞬きよんとした後、クスクスッと小さく笑う。これじゃあどっちが心配してたか分からなくなっちゃうと思いつつ、まだきよんとしている若菜に

「困ったら鯉伴か首無かけじょうろくに声かけなさい」

とだけ言い、京の都へ旅だった。

京都

京都では最近妖怪が姿を現すことが多くなり、陰陽師も困っていた。一人の陰陽師も依頼の帰りだった。

上機嫌で歌っている陰陽師の名は花開院 千尋。

過去・奴良組（後書き）

新キャラ千尋君ちひろに朝霧さんあさぎりです！

朝日達はしばらくででこないと思いますが。

過去が終わったらしばらくお休みします。

キャラ募集が終わるぐらいまで。

別の連載を始める予定です。

詳しく方針を決めたら活動報告にて報告します。

過去・京都（前書き）

表現が難しい・・・。

客観的に見るとどうなっているか心配です・・・。
分からないところがあったら聞いてください。

神の視点です。

過去・京都

京都

千尋は歩いていると、氷漬けの妖怪に出会う。

「ん？」

少し思案顔をしたが、ま、いつか。と割り切り、歩いていった。だが

「なんでこんなに妖怪だらけなの!？」

と怒りながら次々に妖怪を氷漬けにしている女に出会った。さっきの氷漬けの妖怪はこいつの仕業だったのかと千尋がおっとりと考えられていると

「陰陽師!手伝いなさいよ!」

おかしなことを言う子だと思った。陽と陰の陰陽師と妖怪は交わってはいけないものだからだ。千尋自体は大して気にもしていなかったが。

「へいへい。あーこっちに冷氣飛ばさないでくれへんかな？」

「ごめんごめん」

二人は戦闘に入る。とても初めてあって、戦ったとは思えないような息の良さに敵も、自分達も驚いていた。よく聞くと彼女は朝霧と

いい、秀元がいつも話している奴良組の妖怪だった。秀元が話したいと言っているので隠れ家に泊まっていたてもらった。

「千尋はなんで陰陽師になったの？特に妖怪を警戒している様子はないし、私をここに泊めたりしているし」

ん？と千尋はしばらく黙っていたが朝霧が覗き込んできたので苦笑し、

「周りの言いつけでなった。破軍が使えたからな」

少し哀しげな表情をしたあと、にこつと笑い、嫌ってわけでもないけどなと付け足す。でも好きな訳ではない。そういう意味もある言葉を使ったのだから好きではないのだろう。

「そっか。でもすごいよ。言いつけでも色々な物を守るのは難しいことよ。だから・・・すごい」

千尋は朝霧の言葉にきよとんとしたあと、そういう風に考えられるのもすごいことやと褒めた。二人とも柄じゃないと笑い出した。二人は小さな恋が芽生えていることにどことなく気づいてしまった。

二日後

今日は雨。だけど妖怪が休んでくれるわけがなく、いつも通り千尋は妖怪退治にいていた。ただ、一つ違うことと言えば、朝霧がいることぐらいだった。

「ここや。うわぁ池とか最悪やわぁ」

「しょうがないでしょ？仕事なんだから」

うわぁ服とか汚れそうと思いつつもしょうがなく、妖怪を倒していったのだが最後の妖怪を倒した反動で千尋は思いつきりこけて水溜りにジャボン！！と落ちる。その拍子に頭を強く打った。

(ヤバ・・・でもなんとかあるようになるか・・・)

千尋はそう思い意識をフェードアウトした。陰陽師といえど所詮は人間なのでどうしようもなかった。それを見ていた朝霧は

「何やってんだか」

と悪態をつきつつもおんぶし、隠れ家まで運んだ。そして朝霧は額に手を当てるが思わず手を離す。

「何これ・・・すごい熱じゃない」

彼女は雪女。熱いのは苦手だがだめでは無かったのでなんとか世話が出来たがかなり危なかった。しょうがない、と割り切って口移しでお粥まで上げた。最初はなんとも思わなかったが、徐々にあれ？と思い始める。そして

「私、好きなんだ。千尋のこと。じゃなかったらここまでしないよね。普通」

と呟き、私も大概子供ねと思いつつも納得した。

しかたなく、そのまま布団にいられたが、千尋が朝霧の裾を無意識に掴み、離さなかったので

「まったく、子供みたいね」

といいつつも微笑み、一緒に寝てあげた朝霧がいた……。

一週間後

「じゃあな、朝霧。また会おうな」

「もちろん。じゃあね」

さようなら。大好きな人。でもまた会えると信じる。そう二人は願
い、別れた。

しかしそれから二人は会うことなく死んでいつてしまった。
最後に思ったことは二人一緒。

「約束を果たせられなくてごめんなさい（すまんかったなあ）」

永遠の片思いは報われることなく終焉した。

過去・花開院家（前書き）

過去編も大詰めです！

しばらく不定期更新になってしまいましたがよろしく願いします。

神視点です。

過去・花開院家

朝霧が亡くなる前日。

花開院家。

一人の女が門の前に赤子が置かれてるのに気づく。毛布にくるまれていて、茜色 朝日と書かれた紙と一緒に置いてあった。女は赤子を放っておけず、保護したのだ。

皆、人間だと思っていて受け入れたがここは陰陽師の総本山なんだから！赤子など・・・と言う者もいたが女は必死に守った。自らの弟の面影がある赤子を・・・。

現在

「朝日は知っていたの・・・？」

「知ってましたよ。昔、涙ぐみながら話してくれました」

氷麗は苦悶の表情を浮かべる。やっぱりカナちゃん達に見せなくてよかったと思い、このことは心に封印して置こうとリクオは思い、カナ達にはなにも言わなかった。

花開院家

「もうすぐあなたが来て16年ね」

たれそがれるている朝日に声が掛かる。突然のことに驚きゆっくり振り返る。

「真昼姉！」

真昼はクスリと笑った後

「あんなに小さかったのにね」

からかうような口調で朝日に話しかける。案の定朝日はプクウと頬を膨らませ、

「むかしの話だもん」

と拗ねてしまう。それを笑っている真昼は本当の姉のようだった。。。

過去・花開院家（後書き）

オリキヤラ、颯原さつげん 真昼まひるさんです！

真昼さんはどこかへ嫁いでる設定です。

真昼さんの弟というのはもちろん、千尋です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966z/>

妖と陰陽師

2011年12月23日23時52分発行